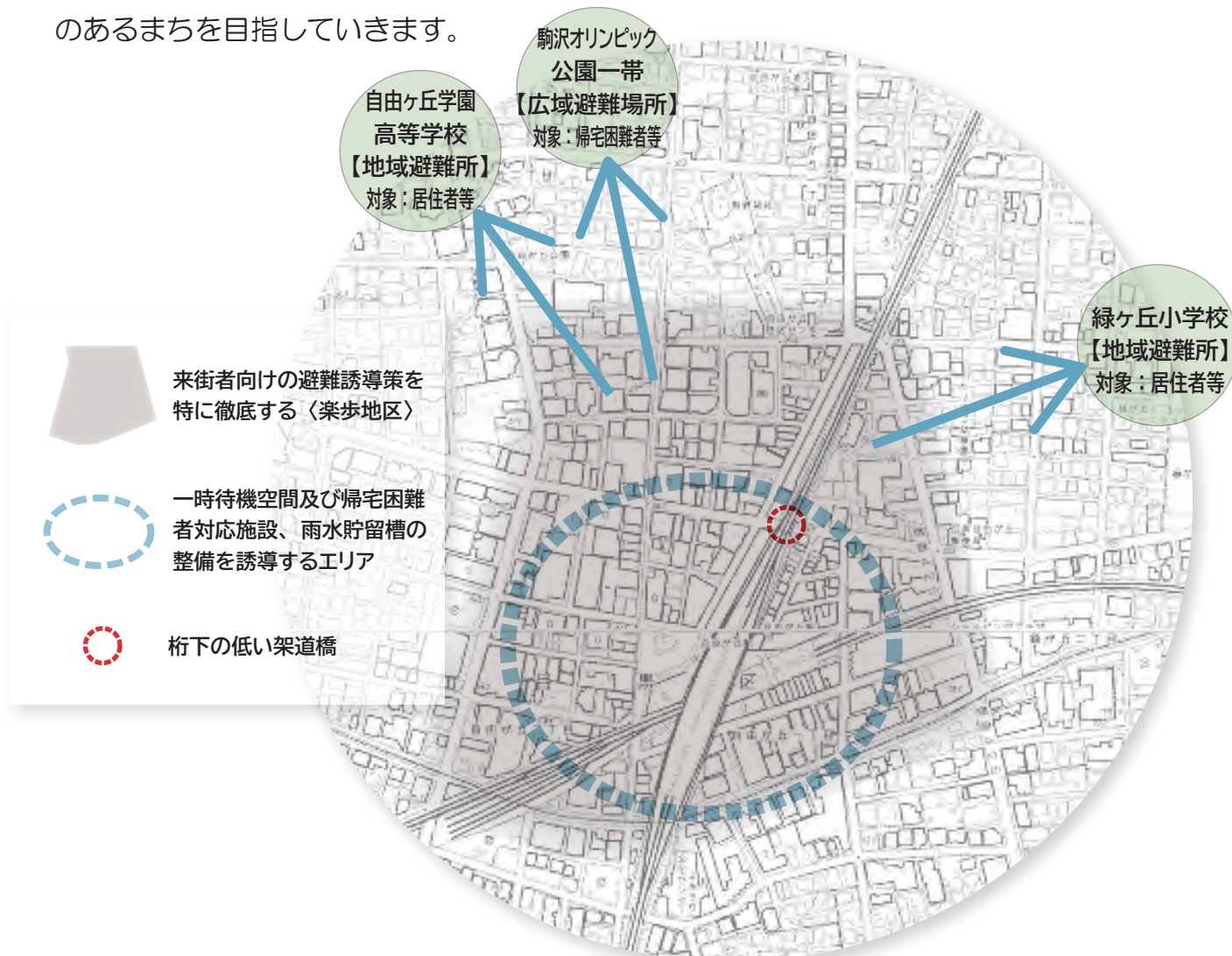


まちを楽しむ誰もが災害発生時に慌てずにすむ 安心感をつくりだす……………人を集めるまちとしての防災力の強化

自由が丘は数多くの居住者・就業者・来街者が利用するまちであり、〈楽歩〉や〈緑装〉などを通じてグリーン社会をリードするからこそ、避難を伴う大きな災害が発生した際における安全安心の提供が求められることから、ハード・ソフト両面の連携によって日頃から災害に強い街を目指していきます。

方針① 緊急時における避難施設の整備促進および対応策の周知を徹底する

鉄道利用者を含めて駅周辺に滞在・滞留する様々な人たちが、災害発生時において一時的に滞留する空間や帰宅困難状態になった際の受け入れ施設や備蓄倉庫をまちの更新に伴って整備するよう誘導を図るとともに、情報通信によるデジタル技術の活用や、避難マップの作成・配布により避難誘導策をテナント等に徹底することで不測の事態への万全な備えのあるまちを目指していきます。



方針② 防災や減災に資する老朽建築物の更新・避難路の確保・緊急車両の通行確保に向けた取組を推進する

グリーン社会をリードするまちを標榜する自由が丘においては、災害からあらゆる人の命を守ることが求められます。

大地震の発生等による建物の倒壊や延焼の危険性を未然に回避するために、特に新耐震基準より前に建てられ、耐震性能の低い建物の積極的な更新を目指していきます。エリアプラットフォーム（後述）を通じた耐震診断助成制度（目黒区）の活用支援策の紹介などにより、ビルオーナーの意識の啓発を目指していきます。

また、災害発生時に電柱等の倒壊により地域避難所への避難経路が塞がれたり、復旧に要する車両の通行が妨げられることがないように、避難路等における電線類の地中化の推進を目指していきます。

また、架道橋のうち桁下が低く緊急車両の通行が不可な箇所について、道路と鉄道の関係改善を図ることで、緊急車両の通行が可能な将来を目指していきます。

方針③ 局所的・短時間での豪雨時に対する雨水排水策の強化と地下水によるリスク回避やその活用策を図る

緩やかな斜面地に形成されたまちであることを背景として、現状においては局所的・短時間での豪雨時に、道路上を流れる雨水が駅前広場等の周辺に溜まり冠水する状況が見受けられ、現在、都と連携した九品仏幹線流域の増強施設による浸水対策を推進しています。

まちの利用者の安全安心の確保に向けて、規模の大きな共同化（再開発事業）を行う地区においては、雨水排水施設の改善や地下空間を活用した雨水貯留槽の整備促進を目指していきます。

また、駅周辺は市街化する以前において湿地のような場所であり、斜面地の地下を流れる複雑な地下水脈の存在が指摘されることを踏まえ、豪雨による増水などデジタルの技術の応用による建物更新の際のリスク軽減策の確保や、地下水の循環やエネルギー活用を目指していきます。

現在の自由が丘駅はこの一帯では最も低い位置にあり、かつては田んぼであり、同時に斜面地の際（きわ）であることが確認できます。



1909年の地形図に未来ビジョン対象区域（約76ha）を概ね重ねた図